花に鳥

菊啾編

天明七年序

序

[illegible]の園小諸なる菊酔子い[illegible]と吾等を[illegible]と
[illegible]の[illegible]と[illegible]布引山い[illegible]景の地
[illegible]と西上人も[illegible]杖を止め一地たるの日の
[illegible]の駒いかるゝ一帝釈山をきゝおよんでと
詠ずるくたよ一所の人の記よ殘さる芭蕉の翁も
此所をさまよひしかさもゝ塊も出よう世の花ゝと
[illegible]れ吟あり百とをとゝ今ゝ[illegible]ゝ仰ぎよ[illegible]人

面陰々々の時の海景を称する事なれ
ども所いと甚の幻色を招きて住まるこの家も
墳丘も茫々たる空の人々も見交はすばかり
物子連るとはらく布引の新たなるの境内を
前場と寂らみて長く後人の風流を偲ぶ
事と然し連の吟を一冊にまとめ侍らん
四中の日ごろ仏の事を書かんと漢詩と雅
まるを高みる時々に高き岡もまた古人の事

みなく入ぬ物子寺意るに又あり日ごろ
やらなくやつまるを此席とおもるとおもしこの四季に
物子の風流をしいまるかくて一帖を書んと絶景を
亜まとまる清い巻とおもと見ぬ布引の滝の子ども
連俳と言ふとのの橋を渡まるとまるとの
俳まる花をみると野する事ましまて

乙卯七月末 仲夏 蘆に志貴の菴

丁未夏日
山東谷師陵

嬉嬉きこゆよ　おきれ

うちつ世きき

義了尊

源義

菊嘯　古道　若き

麥仲　入部の角ふきこゑ

朝宇　須き矣　引きき

烏白　月ふ千ちとあるさ　嬉き

雙鯉　集まる　なるの音ぬ

冥山　仕あまて　山城のきし

一枝　待ちい為ぬ　可聞きる

片咤　佛ちせり　金ちい

こも一本を惜ぬかうの花　似蕉

ほりよせぬ南の嶋の唄聞む　猴

屋敷を和とおもふ春櫓　仲

うすくと日へこうて冬籠　宇

旅寝こそろを知る遠の空　玄

冬のふる茶屋の硯を取出て　朝

思ふ水を栖の時雨　山

秋寒く花咲こすの奥ゆし　梅

冬思ふて寒く咲る朝　帆

大空より徒尾寒雲白す　蓬

皆てさくと見る玉達　歌

寒き角の苦さ冬い合　仲

部を庵の年を経る冬　宇

待春の冬の閑の細雪　玄

はなおそりの梅庵癖　朝

果や此とろ行を南の陰　山

[illegible]く公面書記　枝
[illegible]月の礼を柱[illegible]　帋
梅と[illegible]い[illegible]へ[illegible]　雀
拾佛[illegible]月の[illegible]　東向　物
酒を[illegible]の[illegible]　仲
[illegible]の[illegible]　宇
仁[illegible]　鍋　[illegible]　公
酒樽を[illegible]　[illegible]

[illegible]　山
誰もかも此常へ忠よ[illegible]　枝
[illegible]　帋

やまいの半かの[illegible]
[illegible]人[illegible]酒[illegible]
[illegible]

青樂書[illegible]　如芳菴　義仲
[illegible]　梅雪庵　朝宇

、

城門の松をとはゞ櫻下り

石歌庵　白白

碍と偶に苦む勢山さ偶の霧

益右菴　芦帆

明霞あくるを惜と笠ぬぎ山さくら

益君菴　異山

上ぎぬ取ぬ春の紫色の山ぼれら

白月楊　雙鯉

霞霧の杉い尾上の雪の名

茶香菴　一枝

赤くぬる松下明るや四さ久屋

うの花菴　小蓬

、

碍ぬ高の路路しく
初翁ぬ名句事を
世ぬの蕎ぬる感嘆す

高ぬ名ぬ明くぬし下れ下り

布原菴　菊歌

、

織姫も紙い沖剣や糸ぬれら

玖琉金　排雨

雪打ぬ松ぬ明し山ぬ霧

青水

山さくら誰ぬ探久ぬ一ぬ

素紅

紫くしもくのい紅ぬ榊

梅壽

戎さとも寂く[illegible]むとせの櫻うれ　安之
てもとうとう降るとう降る雨の荷ゆ九ち　東里
自爲し沈丹明月仕合せの爾　雪高
之日月とかく向く花雲ゆ乱れ　一水
九折なる広河しかく八重ち久ら　黄平
京の青い空遠ゆ山さ九ち　如英

丙午年祖翁忌

芭蕉翁ゆ原き雲すゆの蓮水　翁宇

芭蕉翁ゆ苔ゆ水源し　巴山
芭蕉翁ゆ思を遥る青ら一句ゆ　芦帆
芭蕉翁ゆいゆ[illegible]ち[illegible]ら[illegible]ら[illegible]ら[illegible]す　麦仲
芭蕉翁ゆ多き　直す　雲青　宝　菊歌

前の方冷を三つ折く物記

姫姫の[illegible]ら[illegible]ら[illegible]ら[illegible]ゆ遥ち久ら　鱈理
賊のゆも思ようを世の青ら色　水蒼
老楽ゆ鶴青ら[illegible]ら[illegible]ら　一故

四季混雜

山かとやあい斜に花ちる　中町　万山

世のうさを替る庵や雲さえらこの礼　杉庵

、

百宇の間や酔えしあい菅の花　上田連　千冬

かんこうや　深き風も帰るなり　雨乙

冷の墨書　工うさを小のうさを礼　麦こ

燈くすを敵のうち自を入　三机

衣をや燈を過ぎ山は分　如毛

流れし見所　夏の月なるよ　雲常

苔を吹く映風をかさす簾戸の礼　玉馬

卯の花の風に匂ひ樓ミの礼　茶菴

河風やうくかきもくる雲入　宰竹

旅千里仏ていちの青あるし　弁

、

あのあい知るぬ雲あるし梅のたれ　岩村田　周市

樓い低き夢しやたれ雲と　　秋田　打則

時雨の華花の雲雲屋佛　　下総　低低

うれしきもよなきぬ雲と花ひと　　栃木　玉芝

白雲雲しく〳〵はけさ今　　宮市　撥子

這杉や下〳〵岩地つゝ　　吉野所　白柳

花底ひとゝ雲と雲つ朱　　耳取　素花

、

山高く晨明月ふ雲ふ　　戸倉　韋杖

夢いかとの行秋の雲うれ　　東都　呉水

、

思ふ事うれ雲ふ了花雲灑

ゝゝの酒蔵ゝ里や花曇ゝ　　雪中菴　夢古

雲ひ切ゝ月雲川花のり雲ゝ　　完来

ゝも菊物ゝ一重ひ九うゞ　　三鈴

帰来

、

雲白や一筋ゝ雲の陰　　東都　青香

賤う家よりうんでうゑし梅のたね　東部　八雲

なのりやすらん梅雨の音　雨石

神ゝかはゆるゝ芋の清麗　獨歩

帰れさを鹿の花の山　女　年紛

春雨やすらふものはうゑ　秋園

死きうの人いとも哀れ梅　坂布　千丈

莫れ〳〵うき世の花をうゑ　梅庄

朝ゆふの梅雨　世日月　上毛坂布　麦雨

花のもとゆ誰の言ふもちをかれ　北越　沙南

、

蝶くと花の吸ふも牡丹哉　東部　乙河

出ぬ中ゆ知るとは断る人の中　左麦

、

命さへ雨布引山の雲白　か州　紫河

蕊ゝ帝ゝとよ言おとゝ言　吉部　雄陵

杉原へ屋こもむ音や　天川　　地山序　門桑

戸ぬけとゝ探く雪ぬ坂をゝど　如雷庵　尺五

、

終子帰古山ゑゝ晴ゝ月晴　孟方菴　秋瓜

古人部

木曾の仁まを三ぬ九らゝれ　瑞芝

ゑ入ゝ出口ゝ初ゝ春ゝ山ゝ久ゝ　戸蕚

ゑ加張の庵の障ゝ子や山ゝ久ゝ　玉玎

雪魚一杯を探ゝ花見ど　柳斜

雪ゝ見ゝ参ゝゝ峰ゝの月ゝ出ゝど　魚光

関西を巡ゝ梦ゝ中ゝの花　帝文

蝶蝶ゝ蝶の飛行さゝらど　芸和

一二夫尺跑ゝ出ゝる月ゝ出ゝど　成松

悲哀の足の音ゝ春ゝ　仙田

黄なる壁の田舎をゆくや花の中　雑山

家といふもの余下ばかり櫻　かま　素圓

、

ちるうらいかなる仏をとゝ蔦葉うれ　立圓

むかし人十二子い夢をとゝ睡し一醒ゆめ

、

集まる〳〵今古の吟を其作を思ふ世を作る

婚婚わかゝらも影と見ゆる頃　西の菴